

中学校国語科における「故郷」の授業実践の報告

Report of the class practice of “Kokyo” in junior high school Japanese classrooms

長谷川 祥 子 ・ 加賀谷 いづみ
(Sachiko HASEGAWA Izumi KAGAYA)

1. 中学校国語科における文学的文章を「読むこと」の学習指導の課題

中学校国語科における文学的文章を「読むこと」の学習指導は、詳細な読解に偏りがちであると指摘されてから、しばらく経つ。しかしながら、その授業改善は中学校国語科の授業観察等に照らしてみると、進んでいるとは言い難い。中学校国語科の文学的文章を「読むこと」の学習指導の課題は次の4点と捉えている⁽¹⁾。

- (1) 授業者が文学的文章を「読むこと」の授業に、学習計画を超えた授業時数をかけている。
- (2) 授業者の作品の説明や解釈によって、授業を展開している。
- (3) 授業者が想定した主題やテーマを追究している。
- (4) 課題解決学習と称したグループワークによって、時数の多くを費やしている。

2. 研究の目的

本稿では、中学校国語科の「故郷」の授業実践の報告に基づき、文学的文章を「読むこと」の学習指導において、生徒がより多く語る授業の提案を目指している。令和3年度の中学国語教科書の全てに「故郷」は掲載されていて、定番教材といわれている。「故郷」は中学校国語科の文学的文章を「読むこと」の学習の総まとめという位置づけであり、授業者が力を入れる教材である。2020年11月の「故郷」の授業実践の報告から、「1」で述べた課題を補う授業を示していく。

3. 研究の方法

研究の方法としては次の3点を設定している。

- (1) 「故郷」の教科書の学習の手引きや、これまでの実践報告を検討する。
- (2) 「故郷」の授業実践を報告する。
- (3) 生徒がより多く語る文学的文章を「読むこと」の授業を提案する。

4. これまでの「故郷」の授業

(1) 「故郷」の授業実践上の課題

魯迅の「故郷」は昭和28（1953）年度に中学3年で1社に掲載された後、昭和40年代には多くの

教科書で掲載され⁽²⁾、現在に至っている。「故郷」は1921年5月に『新青年』に発表され、魯迅自身を思わせる「私」を語り手とし、私小説風の手法で描かれている。作品の主人公は20年ぶりに故郷を訪れた「私」と理解することができる。魯迅も1919年の末に帰郷し、一家をあげて北京へ移住している。その体験がこの作品の題材になったといえる。

竹内好（1953）は「過去と現在、自と他、願望と挫折などが主人公『私』の行動において統一され、破綻のない、未来性をもった作品世界が構築されている魯迅の代表作の一つである」⁽³⁾と述べている。主人公を「私」とする竹内好の論述について、村上正子（1993）は「『私』を主人公として、『私』の心情と思想を追求するという中学校の授業では常識となっている読み方は、『故郷』の私小説的な一面だけを強調したものに過ぎない」⁽⁴⁾と述べている。村上正子は魯迅の全作品を考察し、13編ある「一人称視点」の小説を「報告者型」と「私小説型」に分類している。その後、「『故郷』は中心人物ルントウの半生を『私』が報告した作品という解釈の方が説得力がある」と論じ、終末の「私」の希望観は、「ルントウの変化に触発された『悲しい』心情をまぎらわすため『自分に言いきかせた』言葉と言うべきものであろう」としている。

それに対して、田中実（2001）は「インテリである〈語り手〉の『私』はついこそ泥までしている『石像のような』閩土より、まともと思え勝ちに過ぎないのであって、その人間性もまた擦り切れ、瓦解し、磨滅していた。このように『私』は自分の置かれている立場を相対化し、自己存立の根拠そのものを追い込んでいき、結果、一種自己解体していく自身を見つめている」⁽⁵⁾と述べている。続けて、「故郷」の終末を「『希望』も『絶望』もたまたまあるとき、現象するものに過ぎず、たまたま人が多く歩けば、そこに自ずと道ができるだけのこと、期待も希望も裏切られるもの」という。

一方、小川愛美（2020）は「故郷」の「『私』自身の『変容』と『私』の語る『希望』、その意図や思い」⁽⁶⁾がなかなか見えてこないといい、「『象徴的な情景描写』に着目することで、生徒は『私』に寄り添い、その変容と彼の口にした『希望』の意味に迫ること」ができると考えている。また、「故郷」の現在の魅力について、高橋伸（2021）は「作品と自分との対話」⁽⁷⁾にあるとし、「異なる時代、異なる制度の異なる国を舞台とした作品と生徒が対峙するとき、従前の思いや考えでは語り切れないという体験が、更に考えを広げたり深めたりしていく」と言及している。

上記の田中実の解釈や、小川愛美、高橋伸の論考は文学を熟知し、人生経験を十分に積み上げた大人の読み方である。村上正子のいう「中心人物ルントウ」を主眼とした読み方が、指導経験上、中学生にとって学習の成果が期待できると考えている。船中で「私」が「新しい生活」や「希望」、「偶像崇拜」を思索している場面を、「自分に言いきかせた」言葉と捉えると、新たな指導上の視点が見出せる。この場面を授業者の多くは生徒に感想を求め、自分が用意した解釈を詳細に説明し、共感を得ることを重視する。ところが、人生経験の乏しい中学生にいくら授業者が解説を加えたとしても実感しにくく、退屈なので逆効果になる場合がよくあった。

（2） 中学国語教科書「故郷」の学習の手引きの検討

ここでは、国語教科書「故郷」の教材文の後に載っている学習の手引きを検討する。学習の手引きは現行の学習指導要領に沿って作成されているため、前の学習指導要領に準拠した教科書の学習の手引きとの比較によって、学習内容の変更を確認することができる。以下、平成28年度、令和3年度の順に、「故郷」の学習の手引きを、東京書籍、教育出版、光村図書と示していく。

① 東京書籍

ア 平成28年度

読み取る

- ① 冒頭の場面から、二十年ぶりに見た故郷の様子を表す言葉を探し、「私」が感じた故郷の雰囲気や、「私」の心境を捉えよう。
- ② ルントーとヤンおばさんについて、過去の様子と現在の様子とを比べてみよう。
- ③ 三十年ぶりの再会の場面から、「私」とルントーのそれぞれの思いを読み取ろう。また、過去の二人の関係からなぜ変化したのかを考えよう。
「たすけ」人物の発言のほか、態度、動作、表情などの描写にも着目して、二人の思いを捉えよう。
- ④ 「私」の考える「希望」や「新しい社会」とはどのようなものなのだろうか。「私」とルントーの関係や、ホンルとシュイションの関係を手がかりにして、話し合ってみよう。

考えを深める

- ⑤ 社会の中で生きる人間の姿について、この小説を読んで感じたことや考えたことを四百字程度でまとめよう。
「たすけ」「私」、ルントー、ヤンおばさんなど、作品中の登場人物に着目しよう。

イ 令和3年度

人物の思いについて考えよう

- ①、②、③（平成28年度と同様である。）

「たすけ」人物の発言のほか、態度、動作、表情などの描写にも着目して、二人の思いを捉えよう。ルントーの言葉がところどころ「……」と途切れていることにも注意しよう。

- ④（平成28年度の「話し合ってみよう」という文末が「考えてみよう」に変わっている。）

社会の中で生きる人間について話し合おう

- ⑤ 「思うに希望とは、……歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。」について、考えたことを話し合ってみよう。

「たすけ」「社会の中で生きる人間」という視点を持って、考えよう。

ウ 東京書籍の学習の手引きの考察

（ア）平成28年度の「読み取る・考えを深める」という学習過程から、令和3年度は「人物の思いについて考えよう・社会の中で生きる人物について話し合おう」と学習の対象が

明確になっている。

(イ) 平成28年度と令和3年度の「①、②、③、④」で、学習課題がほぼ同様である。

(ウ) 「社会の中で生きる人間」を問う際、令和3年度は作品の文言を指定して、生徒の考えを促している。

② 教育出版

ア 平成28年度

確かめよう (小見出しのみ、学習課題は省略)

深めよう

① 「私」にとって、少年「閏土」はどのような存在であったか、捉えよう。

参考 少年時の出会いだけではなく、その後の「私」の人生においてという点も含めて考える。

② 「楊おばさん」と「閏土」について読み深めよう。

(1) 二人の過去と現在の違いはどのようなものか。

(2) 「私」に対する二人の気持ちを想像しよう。

参考 「楊おばさん」が「忘れたかね？」と言うことや、「閏土」が、わんや皿を埋めていたと思われることにも着目しよう。

(3) 「私」は現在の二人のことをどのように捉えているのか、またその捉え方の問題点は何か、考えよう。

考えよう

「思うに希望とは、……歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。」とあるが、ここでの「私」の「希望」とはどのようなものなのか、次の点をふまえながら、文章にまとめよう。

- ・閏土の「偶像崇拜」を批判しているが、自分の「希望」も「手製の偶像」にすぎないと捉えていること。
- ・「海辺の光景」を比較すること。

イ 令和3年度

内容を読み深めよう (小見出しのみ、学習課題は省略)

自分の考えを伝え合おう

① 「楊おばさん」と「閏土」について考えよう。

(1) 「私」に対する二人の気持ちを想像し、過去と現在に分けてまとめよう。

(2) 現在の二人のことを「私」はどのように捉えているだろうか。意見を交流しよう。

② 「思うに希望とは、……歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。」について。

(1) 「閏土」と「私」の「希望」は、どのように異なるのか。

(2) 「私」の捉えている「地上の道」とはどのようなものか考えよう。

ウ 教育出版の学習の手引きの考察

- (ア) 平成28年度の「確かめよう・深めよう・考えよう」という学習過程が、令和3年度では「内容を読み深めよう・自分の考えを伝え合おう」となり、項目が整理され、学習内容も明確になっている。
- (イ) 平成28年度と令和3年度では「『私』に対する二人の気持ち」と、「私」が「現在の二人のこと」をどのように捉えているのかについて、ほぼ同様の課題になっている。人物の「気持ち」を問うより、作品から描写を取り出す課題の方が生徒は取り組みやすい。
- (ウ) 平成28年度と令和3年度で「思うに希望とは、……歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。」という箇所を問い、令和3年度は「希望」と「地上の道」という語句に着目して伝え合う課題になっている。

③ 光村図書

ア 平成28年度

① 確認しよう（小見出しのみ、学習課題は省略）

② 読み深めよう

場面や登場人物の設定に着目して読み取ろう。

- ① 次の風景や人物について、回想の場面と現在の場面では、描写がどのように変化しているだろうか。それがわかる部分を抜き出そう。
- ・故郷の眺め ・我が家の様子 ・ルントウ ・ヤンおばさん
- ② 「私」と「ルントウ」の関係はどのように変わったのだろうか。また、なぜ変わったか考えよう。

③ 自分の考えをもとう

最後に「私」には「希望」という考えが思い浮かぶ。そのとき、「私」はどのような社会を望んでいたのだろうか。話し合ってみよう。

イ 令和3年度

見通しをもつ **捉える**（小見出しのみ、学習課題は省略）

読み深める

2 場面や登場人物の設定に着目して読み取ろう。

- ① 回想の場面と現在の場面とを比べ、描写がどのように変化しているか、それがわかる部分を抜き出そう。
- ・故郷の様子 ・ルントウ ・ヤンおばさん
- ② 「ルントウ」と再会した場面で「私」が感じた「悲しむべき厚い壁」とは何か、考えよう。
- ③ 最後の場面で「私」が抱く「希望」や、望む社会とはどのようなものか。「私」と「ルントウ」、「ホンル」と「シュイション」の関係などを踏まえて捉えよう。また、「私」の考え

方について自分はどう考えるか、話し合おう。

考えをもつ

3 作品を批評してみよう。

読み深めたことを踏まえ、この作品のもつ特性や価値について批評しよう。下段の「学習の窓」などを参考に、観点を決めてまとめてみよう。

振り返る（小見出しのみ、学習課題は省略）

ウ 光村図書の学習の手引きの考察

（ア）令和3年度では学習過程が「見通しをもつ・捉える・読み深める・考えをもつ・振り返る」となり、明確になっている。

（イ）「読み深めよう」で平成28年度は、『私』と「ルントウ」の関係はどのように変わったのだろうか。また、なぜ変わったか考えよう」という課題である。一方、令和3年度は『私』が感じた『悲しむべき厚い壁』とは何か、考えよう」となっている。平成28年度では「私」と「ルントウ」の人物像と、その変化の原因を問うているため、「厚い壁」という語句に注目するより、作品の本質を考察することができる。

（ウ）「読み深めよう」で、平成28年度の『私』はどのような社会を望んでいたのだろうか」という課題に対して、令和3年度は『私』と『ルントウ』、『ホンル』と『シュイション』の関係などを踏まえて捉えよう」と、着眼点を示している。終末は生徒の理解が困難なため、着眼点がある方が生徒は「私」の考えを捉えやすい。

④ 中学国語教科書「故郷」の学習の手引きの傾向

国語教科書3社の「故郷」の学習の手引から、以下の傾向を確かめることができる。第一に、令和3年度の教科書3社では学習過程を明確にし、学習課題を設定している。第二に、令和3年度の方が学習課題の多くが詳細になり、作品の文言を提示後、生徒が考える問いが散見される。第三に、令和3年度の学習課題の多くは作品の文言を具体的に書いているため、作品の本質を問うというより、細部を問うことに重点が置かれている。学習の手引きは、現在の国語科授業の学習内容の一部を表しているとはいえ、上記から文学的文章の詳細な読み方の学習に逆行する可能性があるといえよう。

（3）最近の「故郷」の授業実践

2019年1月号から2021年12月号までの『教育科学国語教育』（明治図書）に掲載されている「故郷」の実践報告を以下に示す。「故郷」の実践報告が1年間で数編ずつ、継続して掲載されている状況から、「故郷」が安定した教材であると再認することができる。

	発行年月	上段が『教育科学国語教育』の特集名や連載名・下段が実践報告名
1	2019年2月	「中学校 語彙力を高める指導術&授業づくりアイデア」 「語彙を自分の言葉として獲得する授業づくり—文学作品の『読む』から『書く』へのプロセスを通して—」
2	2019年3月	「中学校 領域別の授業づくりと多面的・多角的な評価アイデア」 「魯迅『故郷』におけるパフォーマンス評価の試み—我が「故郷」を想う—」
3	2019年5月	「授業の流れがわかる！物語文の板書モデル」 「生徒の思考や考えのズレがわかる板書の工夫」
4	2019年8月	「中学校 教材研究の視点と発問でみる授業モデル」 「音読を繰り返し感動の中心を探る」
5	2019年9月	「学び合いがうまくいく！教科書教材のペア&グループ学習」 「問いを立て、疑問を解決するために話し合おう」
6	2019年10月	「これで失敗しない！研究授業の指導案&実践モデル」 「登場人物の作品上の役割について考える」
7	2020年5月	「定番教材で学ぶ！場面別 物語文の指導技術」 「『交流・話し合い』の技術 『読みの説得力』を話し合う」
8	2020年9月	「主体的・対話的で深い学びを実現する 学習課題&発問モデル」 「話者や視点に注意して読む」
9	2020年10月	「中学校・学習指導案でみる研究授業の展開例」 「出会いと別れ—今、なぜ『故郷』なのか—」
10	2020年11月	「主体的・対話的で深い学びを実現する 学習課題&発問モデル」 「語り手である主人公『私』のあり方を読む『故郷』（各社三年）」
11	2021年5月	「発問でみる！ 物語文の授業モデル」 「社会の中で生きる人間を読む」
12	2021年6月	「教材別でみる 文学の授業の“Re デザイン”」 「[知識及び技能]の明確化を中心として」
13	2021年7月	「Before & After でみる！ 中学校の学習評価プラン」 「粘り強い自己調整は事中評価で育む」

上記の実践報告を、①人物像の変化とその原因を考えている、②描写を読む楽しみを知る課題がある、③作品全体の感想を話し合っている、という観点で検討した。その結果、「4」と「11」の2編が学習の成果が期待できる報告であった。

① 「音読を繰り返し感動の中心を探る」

西田美和（2019）は「故郷」を「中学校での文学的教材の学びの集大成」と位置づけ、次のような単元の指導計画（7時間扱い）を立てている⁽⁸⁾。

第1次 第1時 全文を通読し、初発の感想を持つ。

第2次 第2時 帰郷時、「私」が感じた故郷の雰囲気や「私」の心境を捉える。

第3時 ルントーと「私」の関係について考える。

第4時 物語におけるヤンおばさんの登場の意味を考える。

第5時 「私」の考える「希望」や「新しい生活」を捉える。

第6時 第5時で整理したことをグループで交流し合い、互いの意見をメモする。

→ ワールドカフェ方式で交流する。

第3次 第7時 社会の中で生きる人間の姿について考えたことを、作文「○○（生徒名）」
「故郷を語る」にまとめる。

授業者も生徒も「音読や黙読を繰り返す」という教材研究の姿勢や、学習項目が適切であり、よい。しかしながら、授業者の「感動の中心から発問を生み出す」という発想には疑問が残り、ここは中学生に身につけさせたい文学の読み方を提示した方がよい。また、第5から7時の学習は授業者の「感動」に基づいた活動であるため、中学3年には難しく、作品を離れて、生徒が自身を語る活動になりがちである。

② 「社会の中で生きる人間を読む」

高橋かれん（2021）は「メタ視点で物語を捉えさせ、物語が社会の現実を映し出す側面」をもつことを理解させる指導（6時間扱い）を次のように計画している⁽⁹⁾。

第1時 物語内の時間の変化に着目して、全文を読む。全文を五つの場面に分け、プロット図にまとめる。物語の基本設定を読み取り、学習目標を理解する。

第2時 重要な語句の意味と用法をプリントで確認する。グループごとに一人の登場人物について（人物像・立場）スライドにまとめ、発表する。登場人物の関係性を考察する。

第3時 故郷の様子や人々が変化した理由を読み取る。当時の社会の様子や、「纏足」にまつわる中国の歴史的背景を理解する。私とルントーが再会した時の心情を読み取る。

第4時 再会の場面をルントーの視点で書き直す。グループ内で、再会場面の書き直しを朗読する。グループの代表者がクラス全体で朗読を発表する。

第5時 ルントーの望んだものについて考える。最後の場面の「希望」が指す内容を読み取る。「私」は「希望」をどのようなものと捉えているかを読み取る。

第6時 物語全体に通じるテーマは何かを考える。それぞれが考えたテーマをロイロノートで共有し、他の人の意見をふまえて自分の考えを見直す。テーマについての最終的な自分の考えを文章にまとめる。

高橋かれんが提案する「物語の基本設定」や「故郷の様子や人々が変化した理由」といった学習活動は、文学的文章を読む基本的な事項となり、適切である。第5、6時で、「希望」や「テーマ」を問う学習が従来の文学の読み方の指導と類似しており、主題を追究する学習で終わっている。

5. 「故郷」の学習目標、学習計画、主な発問

（1）文学的文章を「読むこと」の学習事項

現代の電子媒体が多様化している社会で生活している中学生にとって、文学的文章の大切な読み方として、次頁の3項目を設定している。

- ① 人物像の変化とその原因を理解する。
- ② 描写を読む楽しみを知る。
- ③ 作品全体の感想を話し合う。

これらの学習事項を設定した理由は次のとおりである。第一に掲げた人物像の変化とその原因を理解することは、作品の構成を把握することになる。人物像は小説の冒頭と終末では変化し、変化の原因を作品中の描写に見出すことができる。人物像の初めのイメージ、終わりのイメージ、変化の原因と、大掴みで作品を捉えると、小説の全体の構成を頭に入れることができ、作品像を鮮明に構築することができる。

第二に掲げた描写を読む楽しみは、論理的文章とは異なる文体によって、文学的文章の詳細な人物描写や、情景描写、自然描写を見つけ出すことから始まる。「人物の○○○○という役割がよく表れているところに傍線を引きなさい」、「人物の○○○○の様子がよく分かる文章を四角い枠で囲みなさい」等、文学的文章に生气を与える発問課題は、描写を取り出して味わうのに役立つ。描写の価値や意味については授業者が指示することによって、生徒は初めて気づくことが多い。

第三に掲げた感想を話し合う学習は、授業の最後に位置づける。学習の成果を互いに確認し合うのに効果がある。生徒同士が人それぞれの読み方を知り、指導者は生徒の感想を知ることによって、自分自身の授業を評価して、次回に向けて授業を改善することができる。

これら3項目は全てを網羅的に指導するのではなく、教材の特性に応じて項目を選び、組み合わせて授業を展開する。

（2）文学的文章を「読むこと」の学習計画

一つの文学的文章教材にかける時間は4時間と考え、次のような学習を計画している。

- 第1時 前半部のいくつかの課題を考え、話し合う。
- 第2時 後半部のいくつかの課題を考え、話し合う。
- 第3時 文学作品のあらましや、人物像の変化について話し合う。
- 第4時 全体を通読して、作品全体の感想を話し合う。

このように授業を組み立てると、生徒は身につけた学習内容を他の文学的文章を読むときにも応用でき、読書に対する意欲も増す学習を組み立てることができる。1教材に6時間以上かけて学習すると、中学生を教えた経験では、指導の効果が薄れることが多かった。人物像の変化の学習を整然と1時間で教えると、印象が鮮明に残るという感想が多くなるというのが私の指導経験である。

（3）「故郷」の学習目標、学習計画

教科書の学習の手引きや最近の実践報告の課題を補う学習として、「故郷」の学習目標を次のように考えている。

- ① 繰り返し音読して、音読の仕方を理解する。

② 話し合いを通して、人物像の変化に気づく。

③ 学習を通して、描写の読み方を知る。

学習計画は、前頁の「(2)」と同様である。

(4) 「故郷」の主な発問・指示・説明

授業の発問・指示・説明は授業者の台詞が効果を左右する。発問・指示・説明を台詞として表記すると、その効果が安定する。

【第1時】 ※ 丸括弧内は学習内容、山鉤括弧内は発問・指示・説明の意義を説明している。

① 第1時の学習目標

ア 前半を通読（一斉音読）している。

イ 今後の展開が情景描写に託されていることを理解している。

ウ 「ルントウ」の昔の様子に気づいている。

② 第1時の主な発問・指示・説明

1 〔説明〕 魯迅が書いた小説「故郷」を学習します（本時の学習内容の提示）。

2 〔指示〕 先生が読みます。読めない漢字に振り仮名をつけながら、聞きなさい（範読）〈作者、時代背景、難語句の説明も範読の中で指導する〉。

3 〔発問〕 「厳しい寒さの中を、……今に来るかもしれない。」（第1場面、3分10秒）読めない漢字がありましたか（漢字の確認）。〈「故郷」の文章は竹内好の翻訳で漢語の多い文体である。生徒には難しく、苦手な文体で読みこなすのに苦労している。「ハリーポッター」だと一晩で1冊読み終える生徒が、「故郷」の文章では1行ごとに考え込むのである〉。

4 〔指示〕 声をそろえて読みなさい。「厳しい寒さの中を、……」ハイ、よくそろえて読めました（一斉音読）。〈一斉音読は中学3年の場合、1分間400～450字の速さを基準とする。一斉音読を指導すると、難しい漢熟語の正しい読み方と同時に、読みの速さ、リズムが身につく。一斉音読が上達すると、生徒一人一人の音読や黙読も上達し、学力の向上につながる〉。

5 〔指示〕 「……今に来るかもしれない。」の下に「第1場面」と書きなさい（小説の構成を意識させる）。〈第1から5場面に分ける。第4時で場面ごとに呼び名をつける。小説をいくつかに区切って「呼び名」をつけ、その区切った場面ごとに授業をまとめていく。この指導によって生徒は小説の構成に気づく〉。

6 〔発問〕 「私」は何をするために、20年ぶりに故郷へ帰りましたか（語り、「報告」の文体に気づかせる）。解答「引っ越し」

7 〔発問〕 故郷は、帰郷した「私」を歓迎しましたか。（語り、「報告」の文体に気づかせる）。解答「歓迎しなかった」

8 〔発問〕 20年の年月で故郷が大きく変わり、この小説の結末を暗示している表現があります。周りの人と話し合いながら、四角い枠で囲みなさい。枠の下に「情景描写」と書きなさい（情景

- 描写)。〈帰郷した「私」のやるせない心境をよく表した文章である〉。解答「故郷に近づくにつれて、……横たわっていた」
- 9 〔発問〕 侘びしく活気がない家の様子がわかる表現はどこですか。周りの人と話し合いながら、四角い枠で囲みなさい（情景描写）。解答「屋根には一面に枯れ草のやれ茎が、……説き明かし顔である」
- 10 〔発問〕 「古い家が持ち主を変えるほかなかった理由を説き明かし顔である」とありますが、この文章の役割は次の三つの選択肢のうち、どれが最も適当ですか（情景描写）。〈情景描写を説明する学習は高度であるため、生徒には選択肢で考えさせる〉。解答「B」
- A 手入れをしていない家の状態を示している。
B 家を他人に売るほど経済的に困窮している。
C 家族が離散し、老人だけが残っている。
- 11 〔指示〕 これからは皆さんだけで、声をそろえて読みます。「このとき突然、私の脳裏に……」ハイ。（第2場面、5分40秒）すらすら上手に読めました（一斉音読）。
- 12 〔指示〕 読んだ文章の最後の「……顔を合わす機会はなかった。」の下に「第2場面」と書きなさい（小説の構成を意識させる）。
- 13 〔発問〕 11、12歳の少年だったルントウの外側からの様子がよく分かる表現を探し、四角い枠で囲みなさい。枠の下に「人物描写」と書きなさい（情景描写）。〈少年の「私」には英雄に見えた、少年ルントウの描写を取り出す課題である〉。解答「つやのいい……首輪をはめていた」
- 14 〔指示〕 ルントウは「私」の知らない世界をいくつも知っていました。その世界を短い言葉でノートに書きなさい。当たった人は黒板に書きにきなさい（情景描写）。〈少年だった「私」の憧れを端的に取り出す課題である〉。解答例「鳥の捕獲、貝殻拾い、すいかの番、跳ね魚」
- 15 〔発問〕 海辺が自由で楽しい世界であるなら、それと対照的に描かれている世界とは何ですか（情景描写）。〈「14」と対になる課題である〉。解答「高い塀に囲まれた中庭からの四角な空」
- 16 〔指示〕 第1、第2場面を読みなさい。「厳しい寒さの中を、……」ハイ。（第1～2場面、8分50秒）（一斉音読）。〈学習の最後に行う一斉音読はまとめの学習になる。授業者の解説は入れない方がよい〉。
- 17 〔説明〕 この時間は小説の前半から人物や情景の描写を学習しました（学習の意義）。
- 18 〔説明〕 次の時間は小説の後半を学習します（次時の予告）。

【第2時】

① 第2時の指導目標

- ア 後半を通読（一斉音読）している。
イ 「ルントウ」の現在の様子に気づいている。
ウ 「ヤンおばさん」の変化を理解している。

② 第2時の主な発問・指示・説明

- 1 〔説明〕小説の後半を学習します（本時の学習内容の提示）。
- 2 〔指示〕第3場面を声をそろえて読みなさい。「今、母の口から彼の名が……そんなことで四、五日潰れた。」（第3場面、3分20秒）すらすらとよく読みました（一斉音読）。
- 3 〔指示〕「そんなことで四、五日潰れた」の下に第3場面と書きなさい（小説の構成を意識させる）。
- 4 〔指示〕ヤンお婆さんの昔の様子が書いてあるところを四角い枠で囲みなさい（心理的表現）。
解答、昔—「筋向かいの豆腐屋に……薄くはなかったはずだ」
- 5 〔指示〕ヤンお婆さんの今の様子と、その行動が書いてあるところをそれぞれ四角い枠で囲みなさい（人物描写）〈ヤンお婆さんの過去の様子は「私」の回想で書かれているが、現在の様子は人物の外観を描写している〉。解答、今—「頬骨の出た、唇の薄い、……コンパスそっくりだった」、行動—「行きがけの駄賃に……ねじ込んで」
- 6 〔発問〕ヤンお婆さんは「私」をどんな言い方で表していますか（会話）。〈人物描写の中で、会話は最も重要な技法である〉。解答「身分のあるお方・金持ち・知事様」
- 7 〔発問〕ヤンお婆さんの言い方に表れているのは、次のうちどれですか（会話）。〈生徒に会話の意味を考えさせる課題である。人物の心情は説明させない方がよい。大人の社会のことだからである〉。解答「A」
A 貧乏人のひがみ B 尊敬の気持ち C 身分違いの悲しみ
- 8 〔説明〕第4場面を声をそろえて読みなさい。「ある寒い日の午後、……連れて帰っていった。」（第4場面、5分）読み方が上達しました（一斉音読）。
- 9 〔指示〕「連れて帰っていった。」の下に第4場面と書きなさい（小説の構成を意識させる）。
- 10 〔指示〕ルントウの今の様子を外側から描いたところを四角い枠で囲みなさい（人物描写）。〈30年後のルントウの外観の描写を取り出す課題である〉。解答「背丈は倍ほどになり、……幹のような手である」
- 11 〔指示〕ルントウが生活に苦しんでいる様子が書かれたところがあります。四角い枠で囲みなさい（会話・人物描写）。解答「『冬場は、ろくなものが……黙々とたばこをふかした」
- 12 〔指示〕「私」がルントウの変化に気づき、愕然としている様子が分かるところを囲みなさい（心理的表現）解答「私は身震いしたらしかった。……口がきけなかった」
- 13 〔指示〕第5場面を声をそろえて読みなさい「それからまた九日して、……それが道になるのだ。」（第5場面、4分）（一斉音読）。
- 14 〔指示〕「それが道になるのだ。」の下に第5場面と書きなさい（小説の構成を意識させる）。〈第5場面は一斉音読で学習を終わらせる。「私」の思想を生徒に考えさせる課題は高度な内容だからである〉。
- 15 〔指示〕第3から5場面を声をそろえて読みなさい。「今、母の口から彼の名が……」ハイ（第3～5場面、12分20秒）（一斉音読）。

16 〔説明〕この時間はヤンおばさんとレントウの様子の変化を学習しました（学習の意義）。

17 〔説明〕次の時間は作品全体をまとめます（次時の予告）。

【第3時】

① 第3時の指導目標

ア 第1場面から第5場面に名前をつけている。

イ 登場人物を列挙している。

ウ 人物像が変化した原因を考えている。

② 第3時の主な発問・指示・説明

1 〔説明〕この時間は小説全体をまとめます（本時の学習内容の提示）。

2 〔指示〕全文を声をそろえて読みなさい。「厳しい寒さの中を、……」ハイ（全文、21分20秒）。長い小説を通してよく読めました（一斉音読）。

3 〔説明〕各場面に名前をつけます。第1場面と第5場面は難しいので、先生がつけました（小説の構成を意識させる）。〈各場面に命名する課題である。作品の冒頭と終末の名づけは難しいので、授業者が示す〉。第1場面―「二十年ぶりの『私』の帰郷」第5場面―「引っ越しと離郷」

4 〔指示〕第2から4場面の名前をグループごとに話し合って黒板に書きにきなさい。他の人は、よいと思ったグループの名前をノートに書きなさい（場面の名づけ）。解答例、第2場面―「三十年目のレントウ」第3場面―「ヤンおばさんの今と昔」第4場面―「現実のレントウ」

5 〔指示〕登場人物を出てきた順にノートに書きなさい。呼び方に違いがあるときは、括弧の中に書きなさい。書いた人は黒板に書きにきなさい（登場人物の確認）。〈異称も含め登場人物を列挙させる。登場人物は会話をした人物とする。よって「レントウの五歳になる女の子」は登場人物に入れない〉。解答、（1）私（おまえ、僕、シュンちゃん、だんな様）、（2）母（ご隠居様）、（3）ホンル、（4）レントウ（あれ、ルンちゃん）、（5）ヤンおばさん（豆腐屋小町）、（6）シュイション

6 〔指示〕レントウの昔と今の様子をノートに書きなさい。（1）外見、（2）「私」の呼び方、（3）レントウへの名づけ、（4）贈り物、の4点について書きなさい。書いた人から黒板に書きにきなさい（レントウの変化）。解答、（1）外見……昔一つやのいい丸顔・小さな毛織りの帽子・きらきら光るの首輪、今―背丈は倍ほど・黄ばんだ色の顔、深いしわ・目の周りが赤くはれている・古ぼけた毛織りの帽子・薄手の綿入れ一枚・太い、ふしくれた、しかもひび割れた松の幹のような手、（2）「私」の呼び名……昔―シュンちゃん、今―だんな様、（3）レントウへの「名づけ」……昔―小英雄、今―でくのぼうみたいな人間、（4）贈り物……昔―貝殻を一包みと、美しい鳥の羽を何本か、今―青豆の干したの

7 〔指示〕レントウが変化した原因を文章から探し、ノートに書きなさい。また、黒板に書きにきなさい（人物像の変化の原因）〈人物像の変化の原因を考えさせる課題である。人物像の変化の原因は文章以外から導くこともできる〉。解答、レントウが変化した原因……（1）子だくさん、

(2) 凶作、(3) 重い税金、(4) 兵隊、(5) 匪賊、(6) 役人、(7) 地主

8 〔説明〕この時間は場面に名前をつけ、登場人物とレントウの変化を学習しました（学習の意義）。

9 〔説明〕次の時間は「故郷」の感想を発表します（次時の予告）。

【第4時】

① 第4時の指導目標

ア 作品の感想を話し合っている。

② 第4時の主な発問・指示

1 〔説明〕この時間は「故郷」の感想を発表します（本時の学習内容の提示）。

2 〔指示〕全文をそろえて読みなさい。「厳しい寒さの中を、……」ハイ。(21分20秒)よく読みました（一斉音読）。〈生徒同士の発表が聞きやすいように、一斉音読中に場面の名を板書する〉。

第1場面 二十年ぶりの「私」の帰郷 第2場面 三十年目のレントウ

第3場面 ヤンお婆さんの今と昔 第4場面 現在のレントウ

第5場面 引っ越しと離郷

3 〔説明〕「故郷」を学習して、感想を話し合います。小説の感想には自分の人生経験が反映されます。そのため、人によって異なるのが当然で、正しい感想というものはありません。しかし、他の人の感想の中には、自分が表現しようとしている感想の言葉よりも、より深い言葉を発見することがあります。これが感想を話し合う理由です。ときには、先に発表した人と同じような感想になることもあります。それでも、少しもかまいません。「前の人と同じです」と言わずに、自分の考えたとおりに話してください（感想を話し合う理由）。〈感想は他人を批評する道具ではなく、多様性に気づく機会の創出である。他人の感想から学ぶことは多く、クラス全員が発表する活動は、比較するためではない〉。

4 〔指示〕Aさんから席順に、一人30秒くらいでいいから、感想を聞かせてください。どうぞ（感想の話し合い）。〈感想が他の人と同じであると自分で考えても、他の人は違いを発見する例が多い。一人1分という枠組みで、発表の全体像が生徒に見える。断片的な感想でもよく、他者の発表を聞くことに集中するため、要点の板書等はしない。初めに考えのまとめ方が分からなくとも、他人の感想を聞いているうちに、感想のまとめ方が分かってくる〉。

5 〔説明〕（全員が感想を述べ終わったところで）皆さんがいろいろな感想をもっていることが分かって、とても興味深かったですね。これで「故郷」の学習を終わります（学習の意義）。

6. 「故郷」の実際の「第4・5時」の学習内容

(1) 実際の「第4・5時」の学習内容

本実践の授業者は、「5」の「第4時」を以下の学習計画にして、5時間扱いとしている⁽¹⁰⁾。

【第4時】

① 第4時の指導目標

ア 作品の読書感想文を論理的に表現している。

② 第4時の主な発問・指示・説明

- 1 〔説明〕この時間は「故郷」の読書感想文を書きます（本時の学習内容の提示）。
- 2 〔指示〕「読書感想文の書き方」プリントを声をそろえて読みなさい（一斉音読）。
- 3 〔説明〕こういう形式と段落をもった読書感想文を書きます。「はじめ」に全体のあらまし、「なか1・2」に本文の引用を書きます。引用の後に、その場面の役割や効果、意味を書くと、さらによいです。「まとめ」は共通する感想・意見、「むすび」は主張を書きます（読書感想文の構成）。
- 4 〔説明〕原稿用紙を1枚、用意しなさい。小論文のように、空欄に学年、クラス、名前を書きなさい（原稿用紙の書き方）。
- 5 〔指示〕赤線を2行・7行・7行・2行・2行の間に引きます。引いたら行数を確かめなさい（読書感想文の構成）。
- 6 〔指示〕初めの2行に「はじめ」、次の7行「なか1」、次の7行「なか2」、次の2行「まとめ」、次の2行に「むすび」と書きます（段落の長さを意識させる）。
- 7 〔指示〕題名は感想文を書き終えてからつけ、空欄の学年の上に書きます（題名のつけ方）。
- 8 〔指示〕例文を読みなさい（一斉音読）。
- 9 〔説明〕このように、「故郷」から2か所を引用してその感想を書くと、読書感想文が完成します（感想文の書き方の確認）。
- 10 〔指示〕読書感想文を書き始めなさい（感想文の記述）。
- 11 書き上がった人から、提出しなさい（感想文の提出）。
- 12 〔説明〕この時間は「故郷」の読書感想文を書きました（学習の意義）。
- 13 〔説明〕次の時間は、読書感想文を書き上げます（次時の予告）。

教材「読書感想文の書き方」プリント（実際はA4版、2段組の縦書きである）

1 文章形式

段落の名称	役割	文字数
はじめ	全体のあらましを書く。書名を入れる。	2行（40字）以内
なか1	印象に残った場面を一か所、引用する。	7行（140字）以内
なか2	「なか1」とは別の印象に残った場面を一か所、引用する。	7行（140字）以内
まとめ	「なか1」と「なか2」とに共通する感想・意見を書く。	2行（40字）以内
むすび	「まとめ」が全ての人に当てはまるという主張を書く。	2行（40字）以内

※1 「なか1・なか2」では、引用の後にその場面の役割や意味を書くと、さらによい。

※2 引用が長くなる場合は「中略」を用いる。例「この少年がレントウである。（中略）私は坊ちゃんにいられた。」

2 「少年の日の思い出」の読書感想文例（中学1年）

題名	「少年の日の思い出」の「僕」
はじめ	ヘルマン・ヘッセが書いた「少年の日の思い出」に「僕」という人物が登場する。
なか1	一番印象に残った場面は次のところである。「誘惑に負けて、留め針を抜いた。すると、四つの大きな不思議な斑点が、挿絵のよりはずっと美しく、ずっとすばらしく、僕を見つめた。それを見ると、この宝を手に入れたい、という逆らいがたい欲望を感じて、僕は、生まれて初めて盗みを犯した。」
なか2	二番目に印象に残った場面は次のところである。「ちょうを机の上に置いた。それをよく見ないうちに、僕はもう、どんな不幸が起こったかということを知った。そして、泣かんばかりだった。クジャクヤママユはつぶれてしまったのだ。前羽が一つと触角が一本、なくなっていた。」
まとめ	二つの場面は「僕」の行動や心の動き、ちょうの様子が書いてあって、緊張感があった。

※3 「少年の日の思い出」の読書感想文は「まとめ」で終わっている。「故郷」の読書感想文は「むすび」まで書く。

3 「握手」の読書感想文例（中学3年）

題名	信頼される人
はじめ	井上ひさしの作品「握手」に登場する「ルロイ修道士」について述べる。
なか1	「たいていは裏の畑や鶏舎にいて、子供たちの食料を作ることに精を出していた」から、子供思いの働き者であることが分かる。さらに、「おひたしや汁の実になった野菜がわたしたちの口に入るところを、あんなにうれしそうに眺めている」とあり、本当に子供が好きであることが印象づけられている。
なか2	「総理大臣のようなことを（中略）それだけのことですから。」という言葉には、だれに対しても平等で謙虚な人柄が表れている。また「わたしはあなたをぶったりはしませんでしたか。（中略）もし、していたなら、謝りたい。」は、昔のこともごまかさずに向き合う誠実さを強調する意味をもっている。
まとめ	「ルロイ修道士」は優しく誠実だったので、子供たちに信頼されていたと思う。
むすび	人の上に立つ人こそ、優れた人格者であるべきである。

【第5時】

① 第5時の指導目標

ア 作品の感想を表現している。

② 第5時の主な発問・指示・説明

- 1 〔説明〕「故郷」の読書感想文の続きを書きます（本時の学習内容の提示）。
- 2 〔指示〕書き上がった人から、提出しなさい（読書感想文の提出）。
- 3 〔説明〕時間がある人は読書に充てます（次の学習内容の提示）。
- 4 〔説明〕書き上がった読書感想文を何点か紹介します（感想文の読み聞かせ）。〈授業者が、そのクラスから2、3点選んで読み上げる〉。
- 5 〔説明〕この読書感想文は、変わり果てたルントウの様子を適切に引用し、描写が意味を書いていて、大変上手です（読書感想文の評価）。〈授業者が生徒の名前を伏せて、数点、読み聞かせる。読書感想文に対して、生徒が感想を述べることもできる〉。
- 6 〔説明〕読書感想文を書くことで自分の読みを深めたり、他の人の考え方に触れたりすることができました。これで「故郷」の学習を終わります（学習の意義）。

（2） 授業者による考察

本実践の授業者は「故郷」の実践後、以下のように考察している。

- ① 「少年の日の思い出」（中学1年）、「盆土産」（中学2年）、「握手」（中学3年）の指導で、文学的文章を読む学習を積み上げている。これらで学んできた描写の効果や役割を考える読み方が、「故郷」の学習に繋がっている。
- ② 作品の場面ごとに描写を読み取っていき、「私」や「レントウ」の人物描写を根拠にして、人物像の変化を理解することができた。
- ③ 読書感想文の書き方の理解が不足している、あるいは抵抗のある生徒が各学級で複数名いた。描写を探し、それらを根拠にして感想文を組み立てるという方法で、抵抗なく書いたり、自分の意見に結びつけて述べたりすることができていた。「はじめ・なか・まとめ・むすび」という構成の小論文指導の積み重ねがあったから、同様の文章構成で書くことができた。

7. 「故郷」の生徒の読書感想文

第4、5時で生徒の読書感想文の多くが、レントウの変化や「私」との関係の変容を書いている。以下、生徒の読書感想文を2作品載せる。

（1） 生徒作品A、題名「貧しいレントウ」

魯迅が書いた「故郷」にレントウという人物が登場する。（はじめ）

「艶のいい丸顔で、小さい手織りの帽子をかぶり、きらきら光る銀の首輪をはめていた」という描写から、子どもの頃は裕福だったと考えられる。しかし、「背丈は倍ほどになり、（中略）松の幹のような手である。」という描写によって、昔より質素な生活を送っていると考えられる。（なか1）

子どもの頃のレントウは「貝殻一包みと、美しい鳥の羽を何本か届けてくれた。」子どもにとっては嬉しい品物だが、今のレントウは「少しばかり、青豆の干したのですが」というところからいろいろなことで、お金があまりなく、裕福な暮らしを日々送っているとは考えることができない。（なか2）

レントウは、どちらも昔より今の方が金銭の余裕はなく、大変な思いをしている。（まとめ）

お金のことは使い方一つ間違えるだけで、大変なことになりかねない。（むすび）

（考察）① 「なか1」でレントウの外観の人物描写、「なか2」はで贈り物という行動について、それぞれ過去と現在とを比較し、書いている点が良い。

② レントウの変化から「大変な思い」という共通する性質も的確に導き出している。

（2） 生徒作品B、題名「大切な存在」

魯迅の作品「故郷」に登場する、主人公と「レントウ」の関係について述べる。（はじめ）

「彼は人見知りだったが、（中略）」私たちは仲良くなった」や「惜しくも正月は過ぎて、（中略）」

とうとう父親に連れてゆかれた。」から、二人は心を許し合っていて、別れを惜しむほどの大切な存在なのだろうと考えられる。また、レントウに会うことが「待ち遠しかった」と書かれていることからそういえる。(なか1)

「私は身震いしたらしかった。悲しむべき厚い壁が、二人の間を隔ててしまったのを感じた。私は口がきけなかった。」というところから、幼い頃は互いをあだ名で呼び合っていて親友だったのに、今は身分差の影響で他人行儀な呼び名でレントウに呼ばれている。主人公は何ともいえない悲しい気持ちだと印象づけられる。(なか2)

身分のせいで大切な存在と距離ができ、遠くなることはつらいだろうと思った。(まとめ)

人は自分が一緒にいたい人と、一緒にいるべきである。(むすび)

(考察) ① 「なか1」では「とうとう父親に連れてゆかれた」という少年レントウの行動を書き、「なか2」で「身震いしたらしかった・口がきけなかった」という「私」の行動によって現在の二人の関係を書いている点が優れている。

② 二つの具体的事例と「まとめ」の「大切な存在と距離」ができたという性質とがよく結びついている。

8. まとめ

ここまで、中学校国語科の文学的文章「故郷」を「読むこと」の授業実践の報告に基づいて、人物像の変化や、描写を読む楽しみを知るという学習事項を設定して、社会に対する思想を表現している等の、抽象的な読解から、生徒の感想を具体的な表現に転換していくことの重要性を述べてきた。

文章を細かく調べすぎたり、時代背景を詳しく説明しすぎたりすると、生徒が文学作品を嫌いになることがあった。1教材にかける時間を短く切り上げる方が、生徒は自分の文章に、小説で学んだ表現を応用する、というように作品を立体的に身につけようとする。

今後、授業者が作品に対する自分の研究成果を語らず、生徒により多く語らせる授業に改革することが一層必要であり、このような授業実践を積み上げていく。

「注」

1、長崎伸仁(2013)は「読むこと」の指導過程論について、「基本的には、三読法の変形だと見て間違いなだろう」とし、「三読法はなぜ未だに、昭和初期から途切れることなく日本の国語教育界に浸透しているのだろうか。説得さゆえか、それともシンプルさゆえか…。そろそろ『新三読法』なるものの登場があってもよさそうなものである」と述べている。文学的文章を詳細に読解する授業が継続していることへの批判と理解することができる。戦後、文学教育の指導理論は多数存在しているが、「三読法」を超える理論は登場しなかったという貴重な論考である。三読法の「浸透」によって、授業改善が進みにくいともいえるであろう。('読むことの指導過程論' 全国大学国語教育学会編著『国語科教育学研究の成果と展望 II』学芸図書、167)

2、田中実、須貝千里編(2001)「故郷」『文学の力×教材の力 中学校編3年』教育出版、52.

- 3、竹内好（1956）「解説」『魯迅選集 第1巻』岩波書店、246.
- 4、村上正子（1993）「中学校文学教材における発問の研究—『故郷』の実践記録によって—」横浜国立大学大学院学位論文、13.
- 5、田中実（2001）「虚妄の希望・虚妄の絶望—『故郷』の〈ことばの仕組み〉」田中実、須貝千里編『文学の力×教材の力 中学校編3年』前出、23-24.
- 6、小川愛美（2020）「教材4 故郷」（中3）」松本修、桃原千英子編著『中学校・高等学校国語科 その問いは、文学の授業をデザインする』明治図書、50.
- 7、高橋伸（2021）「教材としての『故郷』」高橋伸編著『対話的な学びで一人一人を育てる中学校国語授業 3「故郷」の授業』東洋館、4.
- 8、西田美和（2019）「音読を繰り返し感想の中心を探る」『教育科学国語教育』第836号、84-87.
- 9、高橋かれん（2021）「社会の中で生きる人間を読む」『教育科学国語教育』第857号、72-75.
- 10、これまで構想した「故郷」の学習計画等を基にして、2020年11月の授業実践を「6」で報告している。（長谷川祥子（2014）「文学的文章教材の授業改革の試み—「故郷」を例に一」『語学文学会』第53号、21-30）